

くらしナビ

医療

医療事故 拒否を一転、報告

「日本トップの病院」で心臓手術を受けた患者が亡くなった。事故調査を求める遺族に対し、病院側は1年半以上にわたって拒み続けていた。「患者中心の医療の理念に反する」。学会の重鎮が論文で公然と批判する事態になってようやく、病院は第三者機関に報告し、真相解明に向けて動き出している。

「日本トップ」NCGM重鎮の「苦言」で

●「患者中心を無視」

2020年12月10日、東京都内の70代男性が国立国際医療研究センター(NCGM、新宿区)で手術を受けた。遺族によると、男性は心臓内で血液の逆流を防ぐ弁がきちんと閉じない「僧帽弁閉鎖不全症」だった。

手術記録などによると、執刀医は右胸を小さく開いて内視鏡などを入れて操作する「低侵襲心臓手術(MICS)」という方法で、僧帽弁の修復を試みた。うまくいかず、人工弁に置き換える方法に変更。手術の時間が5時間に迫る中、心筋梗塞を起こした。男性は大学病院へ搬送され、翌21年2月に亡くなった。解剖では「広い範囲で心筋(心臓の筋肉)が壊死」していた。

医療法により、医療機関は患者が死亡する医療事故が起きた場合、日本医療安全調査機構が運営する「医療事故調査・支援センター」に報告し、院内調査をする義務がある。患者側に事前に説明するなど死亡リスクを予期していた場合は除外され、予期していた

かどうかの判断は病院に委ねられている。

遺族によると、NCGMは「心筋梗塞は予期された」として報告を拒否。「3名の外部専門家医師」の見解を踏まえて、手術に「妥当性があり、標準的な水準の範囲内だった」との見解を示した。ただ、3人の氏名、意見書の内容は遺族に開示していない。

この対応を巡り、日本心臓血管外科学会名誉会長の高本真一・東大名誉教授が22年9月発行の同学会誌に批判する論文を寄稿した。高本氏は、遺族から提供を受けた手術記録などを基に経過を検証した。心臓手術では心筋を保護する液体(保護液)を20〜25分間隔で注入する必要があるが、今回は最大46分間空いており「保護が十分ではなかったと考えられる」と判断した。

心臓手術の際には、空気が心臓内の血管に入り込み、心筋が壊死することは心臓外科医の間では知られていたと指摘。だが、空気除去の注意義務を怠ったため、「広範囲の心筋の壊死を招いたと想定される」と分析した。事故後の対応について「医療事故の対応性が高いにもかかわらず、患者中心の医療を無視する作業を行ってきた」と苦言を呈した。

●不信募らす遺族

するとNCGMは一転して、10月に報告した。遺族に「論文で見解を示されたことを踏まえ、より中立性・公平

性が確保された体制での調査を行うべきだと判断した」と説明した。今後、病院内で調査し、結果を遺族に報告することになる。

遺族は納得していない。亡くなった男性の弟は「NCGMは原因究明を拒否してきたし、今でもほとんど何も説明していない」と批判する。手術の記録動画の一部が開示されたが、NCGMは当初、「残っていない」と説明しており、不信感を募らせる。

NCGMは毎日新聞の取材に「(高本氏の)論文の事案と類似した事案が発生したことは事実」と回答し、事実関係を否定しなかった。医療事故調査・支援センターの統計では、制度が始まった15年10月から21年末までに、400床以上の病院の5割が事故を一件も報告していなかった。NCGMでは、今回の心臓手術以外に5件の医療事故を報告しているが、事案の詳細は明らかにしていない。

医療事故の報告が進まない現状について、高本氏は論文で「施設の評判が悪くなるというよう、病院の利益だけを考えて医療事故と判断しないことが多いためではないか」と推測する。毎日新聞の取材に対しては「NCGMという日本トップの病院が、患者中心の医療を提供しないことは非常に残念だ。医療事故の報告が医療機関の判断に委ねられる現行制度を見直すべきではないか」と話している。

【原田啓之、写真も】



国立国際医療研究センター病院―東京都新宿区で